

第20回国際日本学シンポジウム
変革と継承の明治文化—地域／都市からみた文化形成—
【総括】

難波 知子*、湯川 文彦**

本年2018（平成30）年は、1868（明治元）年から150年目にあたり、これを記念した企画展示や講演会などが各地で盛んに開催された。本学でもこの機会に、明治以降の文化形成をテーマとするシンポジウム「変革と継承の明治文化—地域・都市からみた文化形成—」を企画し、2018年7月7～8日の2日間にわたり開催した。

これまで各研究分野において、明治維新や日本の近代化をテーマとする研究が数多く取り組まれ、その成果が蓄積されてきた。また研究の枠組みについても、日本だけの視点にとどまらず、東アジアや世界との関係で日本の近代を捉え直したり、地域の視点から国家や近代化の歴史を再考しようとするアプローチも広がっている。しかし一方で、政治・経済・教育・産業・文化など取り上げられるテーマが多岐にわたり、細分化されるようになると、研究対象や研究領域を異にする研究者間の交流が行なわれにくくなることも確かである。そこで、本シンポジウムでは、明治以降の文化形成という幅広いテーマを設定し、各分野の研究者の方々にそれぞれの関心からご報告いただき、研究成果の共有および議論の促進を目指すこととした。ゆえに、報告内容は、音楽、大名華族、技術、行政、祭礼、商店街と多岐にわたる。さまざまな切り口から、明治文化を捉え、交流を深めることで、新たな研究のきっかけが生まれることを期待した。

シンポジウム1日目のテーマは「地域からみた文化形成」である。最初にデンマーク・コペン

ハーゲン大学のマーガレット・メール氏による基調講演を行なった。報告タイトルは「ローカル・ナショナル・グローバルの相互関係—四竈兄弟と仙台地域の音楽文化を中心に—」である。メール氏が着目したのは、仙台を中心とした四竈訥次・仁爾兄弟の音楽活動である。彼らの活動を論じるにあたり、メール氏はグローバル・ヒストリーの視点、すなわち明治日本における西洋音楽の受容を、西洋音楽のグローバリゼーションの一面として検討する必要性を指摘した。四竈兄弟は東京で西洋音楽を学んだ後、兄の訥次は音楽専門誌『音楽雑誌』を刊行、弟の仁爾は仙台に戻り、音楽教育や音楽文化の普及に努めた。ただし、彼らの活動を詳細にみていくと、西洋音楽の普及だけでなく、日本音楽や明清楽（江戸時代に中国から伝えられた音楽）などを含めた、広い意味での「音楽」の発展に尽力したことがわかる。四竈訥次が編集した『音楽雑誌』には、西洋音楽や日本音楽のみならず、さまざまな音楽のよいところを探って、音楽の改良を進める考えが表明されるが、この背景には、近代国家の日本にふさわしい新しい音楽、すなわち「国楽」（national music）を創造しようとする試みが考えられる。「国楽」の創造は、日本に限らず、国民国家の形成過程でみられるグローバルな近代化の共通した現象といえる。さらに、四竈訥次の『音楽雑誌』には、日本各地の演奏会や音楽イベントなどローカルな音楽情報が掲載され、全国の読者に向け情報伝達の機能を果たすとともに、誌面を通じて音楽文化を共有できる共同体意識、ナショナルなネットワークの形成に

*お茶の水女子大学准教授

**お茶の水女子大学助教

も寄与した。このように、四龍兄弟の活動をローカル・ナショナル・グローバルな視点から捉え直すメール氏のアプローチは、西洋音楽のより詳細な普及の様相を明らかにするとともに、西洋音楽の普及だけにとどまらない音楽文化の展開、音楽の近代化をめぐる問題を鮮やかに浮かび上がらせた。

続いて、青森中央学院大学の北原かな子氏による研究報告「洋楽受容と士族たち—津軽地方を中心に—」を行なった。北原氏は、津軽における士族の音楽への取り組みに焦点を当てた。弘前藩では辺境意識の打開のため、明治のごく初期に洋学とともにキリスト教を受け入れ、地域の近代化に努めた。キリスト教文化の受容に際し、讚美歌が洋学教育を受けた士族たちによって歌われたが、なじみのない音階や声を揃えて歌うことに苦労したエピソードは、西洋という異文化に初めて接した人々の戸惑いや葛藤が感じられて興味深い。讚美歌などの洋楽が次第に普及していく一方で、伝統的な日本音楽（邦楽）の保存にも力が入られる。弘前では、楠美家が代々平曲（琵琶の伴奏とともに『平家物語』を語る音曲）を伝承し、明治以降、邦楽の調査・保存に奔走した。楠美家の関係者は、邦楽の中でもとりわけ平曲の調査・保存に力を入れたが、これには録音の他に五線譜による採譜という手段が採られた。平曲の五線譜への採譜は、西洋音楽と平曲のどちらにも通じていなければならず、楠美家の一人、西洋音楽を学んだ楠美恩三郎が担当した。「邦楽」という概念自体も、またその保存の手段としての五線譜への採譜も、西洋音楽が前提となっており、邦楽をめぐる一連の動きも西洋音楽のグローバル化もたらした一局面といえよう。

1日目最後の研究報告は、東京大学大学院博士後期課程の寺尾美保氏による「大名華族としての島津家と鹿児島」である。寺尾氏は鹿児島島の島津家を事例に、大名華族と旧領地（地域）の文化形成の關係に注目した。具体的には、旧大名

家・島津家の「家」の歴史が、鹿児島という「地域」の歴史として定着していく契機を探ることである。現在、〈鹿児島島の歴史〉と〈島津家の歴史〉は、ほぼ同質のものともみなされているという。その証拠に、鹿児島市の市章は、島津家の家紋である丸に十字紋の図案であり、島津家の博物館（尚古集成館）や庭園（仙巖園）などは、一時鹿児島市による運営の時期があったほど、両者は近い關係にある。現在、島津家ゆかりの施設は、鹿児島市を代表する観光名所にもなっており、島津家のもつ歴史や文化が、地域の資源として活用されていることがよく分かる。報告では、こうした地域の歴史を形成するきっかけとなった島津家の修史事業、特に三公（斉彬・久光・忠義）を中心とする事績の顕彰や、それに関連して大正期に建立された三公の銅像、島津家の歴史を展示した尚古集成館の公開について詳細に取り上げられた。ただし、島津家が描こうとした歴史に西南戦争は含まれなかった。家や地域の歴史として何を語り、何を語らないのか。取捨選択の問題は常についてまわる。明治維新後、旧大名たちは華族に叙され、新しい社会のなかで自らの役割と位置を定めていくが、旧領地との關係が断ち切られたわけではない。地域の発展のために資産の一部を提供し、学校を建てたり、産業を興したり、さまざまに貢献した大名華族もいた。特に島津家の場合は、旧領地との結びつきが強く、与えた影響が大きかったと考えられる。明治以降の地域の文化やアイデンティティの形成を論じるにあたり、「大名華族」が果たす役割が小さくないこと、それにも関わらず、この視点からの研究がほとんど進められていないことが、今後の課題として指摘された。なお、寺尾氏の報告内容は近く公開される予定のため、本誌には要旨のみの掲載とした。

シンポジウム2日目は、「都市からみた文化形成」をテーマに基調講演と研究報告3件を行なった。基調講演は、東京大学の鈴木淳氏による「煙突と電柱の立ち並ぶ街—明治期東京の技術と生活

一」である。鈴木氏は、都市の風景と生活を大きく変えた「煙突」と「電線・電柱」が、日本の自然環境や技術的条件と関わりながら、定着していく過程を取り上げた。煙突が都市の生活に持ち込まれたのは、浴場や暖炉であった。銭湯の煙突といえば、「〇〇湯」と記された風呂屋の看板でもあったが、このような高さのある煙突が普及するのは、鉄筋コンクリートが使用され始めた大正半ば以降のことである。明治期には、煉瓦という不燃性の高い新素材が建築技法とともに欧米より導入され、洋館の建築や近代的な建造物に用いられた。この煉瓦は、風呂や暖炉の火元周辺の防火設備にも徐々に使用されていく。しかし、明治27(1894)年の東京地震において、木造の建物に備えられた煉瓦造りの煙突は倒壊し、死傷者を出した。これによって、煉瓦造りの建築技法は、耐火には向いても、耐震には向かないことが明らかになった。以後、大正期の鉄筋コンクリートの出現まで、最低限の新技术の導入に加えて、在来の生活文化を接合しながら、入浴や暖房をめぐる都市生活が営まれていった。新しい技術の導入は、それを受容する側の環境や条件に大きく左右され、その土地に暮らす人びとの生活に適合したあり方が模索される必要があった。また、人々の生活に明かり(電燈)や新しいコミュニケーションの手段(電話)をもたらした電線・電柱も、都市らしい風景をつくり出した。明治40(1907)年の『風俗画報』(新撰東京名所図会)に掲載された本郷三丁目の交差点を描いた風景図には、おびただしい数の電線が電柱の間を張り巡らされている。この電線と電柱は、景観を損なうものとして批判され、欧米のように電線を地中化すべきとの意見が提出されたが、コストや手間の問題、湿気や降雨の多い日本の自然条件、道路の舗装状況、さらには利便性を優先する向きにより、長きにわたり実現しなかった。人々の便利な生活を支える電線・電柱は、不体裁な景観をもたらしつつも、都市や文明の象徴としてその姿を強く印象づけた。

続いて、お茶の水女子大学の湯川文彦氏による研究報告「官僚からみた「都市」問題—明治前期の行政文化と都市—」を行なった。明治以降、首都(首府)となる東京は、近世都市としての江戸を引き継ぎつつ、新政府の示す統治の理念やシステムを実現すべく近代都市への変革が目指された。しかし、旧来の統治機構や共同体において長く保たれてきた都市の秩序を変えることは容易でなかった。湯川氏は、江戸から東京への都市の変革の困難さを、新しく統治する側となった明治の官僚(政府官員)たちがどのように認識し、いかにそれらを乗り越えようと議論を重ねてきたかをたどり、都市の近代化が抱える問題やそれに対する行政の動向を取り上げた。当初、東京への変革は急激な施策を避け、旧幕府の統治を継承する方針が示された。急速な変化が人心に動揺をもたらし、新政府への不信につながることを恐れたからである。しかしこの継承は変革を見据えたものであった。東京を含む都市は、地方制度の統一が目指されるなかで、開化の先進地として変革の手本とされる一方で、旧慣の集積体であるがゆえに、動かしたい側面も有していた。次第に東京は、新政府が掲げる公平な統治、全国一般の改革という路線から外れ、特別扱いを求めるようになっていく。先進的でありながら、その巨大さ、複雑さ、多様さが急速な変革を妨げる要因にもなり得る都市の姿が、それを扱おうとする官僚たちの苦悩とともに見えてくる。

次に、九州産業大学の平山昇氏による研究報告「都市祭礼の近代史—博多松囃子を事例に—」を行なった。平山氏は、博多どんたくの源流とされる博多松囃子を事例に、明治以降の都市祭礼の変容過程を取り上げた。現在、博多どんたくは毎年ゴールデンウィークの5月3~4日に開催され、200万人ともいわれる見物客を集めている。この祭りの起源とされるのが博多松囃子であり、三福神(福神、恵比須、大黒)と稚児に扮した一行が福岡・博多の町を練り歩き、祝賀するイベントで

ある。博多松囃子は、近世には正月15日に行なわれた藩主への表敬・祝賀行事であったが、明治以降、皇室や軍隊との関係で、その実施時期を幾度も変更した。祭りの時期の変更は、祭りの由来やそれに伴う祭りの意味を大きく変える重大事である。特に明治31（1898）年以降、陸軍の招魂祭と結びついたことにより、松囃子は正月の祝賀行事という意味を失い、祭りに期待される役割も改編されていった。さらに大正・昭和期に入ると、三福神や稚児に付随していたその他の出し物（どんたく）が肥大化し、その賑わいを商業利用しようとする思惑が働くようになる。結果、松囃子よりもどんたくが優勢を誇る状況が生み出されていったと考えられる。博多松囃子の明治以降の展開をみていくと、祭りをめぐる思惑や関係者の駆け引きが、祭りのあり方や意味を変容させてきたことがよく分かる。

2日目最後の研究報告は、北海道大学の満園勇氏による「商店街の成立史からみた明治時代一店舗併用住宅に注目して―」である。スーパーや大型ショッピングモールの台頭に押され、地域に密着した商店街が廃れつつある状況は、全国各地でみられる。こうした商店街の成立は大正期以降、両大戦間期とされているが、満園氏は明治期の小売業における店舗併用住宅に注目し、都市の商業地区における職住関係の変容やその後の商店街の組織化およびまちづくりの取り組みなどについて取り上げた。明治期には店舗をもたない行商人が多く、商品を陳列販売する店舗は、都市における防火対策への取り組みを背景とし、東京では銀座の煉瓦街のほか、土蔵造の町家が数多く建設されたことにより実現していった。これらの店舗は住宅を兼ねた建物であったが、明治末から大正期になると職住分離が提唱され、特に地価の高い銀座では職住分離の割合が高くなっていく。昭和期に入ると、銀座においても商店街の組織化がみられ、柳をシンボルとしたまちづくりの活動が活発化していくが、それを担ったのは銀座に暮らす職住一

致の商人たちであった。職住分離が進み、人の出入りが著しい銀座においても、古くからそこに暮らす人びとがおり、その地縁的なコミュニティがまちを形成してきた歴史がある。

シンポジウム両日とも、研究報告後にディスカッションの時間を設け、フロアからの質問も含め、活発な意見交換が行なわれた。そのなかで、シンポジウムの共通テーマとした「明治文化」という切り口に、さまざまな概念や事象を包括する面白さを感じられたとの発言をいただいた。この面白さが実現するためには、必ずしも同じ専門とは限らない聴衆に向けて情報発信する報告者側の配慮とともに、それぞれ異なる関心をもった聴衆者側の好奇心や積極的な関与が必要となる。双方の歩み寄りの場として、本シンポジウムが新たな出会いや交流の機会となったならば、望外の喜びである。多様なテーマを扱うことは主催者にとっても大きな挑戦であったが、関心や視野がこれまで以上に広がり、専門の壁を越えることの面白さと苦労を実感するよい機会となった。

また、シンポジウム全体を通して、明治150年の諸企画が前提とするような明治に対する理解とは一線を画する時代のイメージを提示できたのではないかというコメントもいただいた。明治150年の記念事業に関しては、内閣官房のなかに推進室が設けられ、「明治の歩みを次世代に伝える」「明治の精神に学ぶ」「日本の強みを再認識する」という方針を掲げ、関連施策が推進された。おおまかに捉えるならば、ここで提示された明治の時代像とは、国づくりや近代化に向けて大変革を成し遂げた明治であり、それを「偉大な功績」として顧みる視線、その定まった評価を前提とする傾向があった。それに対し、本シンポジウムでは、変革や継承のプロセスに含まれる、さまざまな議論や葛藤をつぶさに取り上げることで、明治の多様さ、複雑さ、捉えがたさを提示することができたのではないだろうか。多面的な明治の理解に向けて、ささやかな一歩を踏み出せたことは、本シ

ンポジウムの大きな成果である。

最後に、有意義なご報告をいただいた報告者の皆さま、積極的に質問を寄せていただいた参加者の皆さまに厚く御礼申し上げます。シンポジウムの盛況はすべて皆さまの歩み寄りのおかげである。

(文責：難波知子)